「オルガン」の生涯学習

～ その美しさとむつかしさ ～

水垣　玲子

はじめに

聖徳大学オープン・アカデミー(SOA)で，無謀にも「パイプオルガンの講座を開いてみたい」と当時の田中嘉英事務局長に「いつの日か，ということですが――」と何度も念を押しながらお話ししたのは，たしか平成8年のお正月，新年顔合わせ会の場であった。

何しろパイプオルガンというのは特殊な楽器で，建築物のような巨大さ，音を鳴らす仕組みの複雑さ，電気の使用量の多さ，演奏のむつかしさ――そして出てくる音の大きさや美しさを考えると，常識的には素人の方たちの手に負えるものではないと思われた。私自身も年に3・4回弾かせていただける(練習も含めて)かどうかという楽器を，10回の講座の後でほんとうに音を鳴らせるだろうか？川並香順記念講堂の顔ともいえるオルガンを，生涯学習の受講生たちに弾いてもらっていいのだろうか？数々の心配や懸念が頭の中をかけめぐった。でも，だからこそやってみたいという思いにもなったわけである。

2～3年準備をして，と考えていたところ，突然「4月からやってみましょう！」と田中局長から連絡をいただいたのにはビックリ仰天。SOA校長でいらっしゃった平岡忠先生からも「ひとつ，よろしくお願いしますね！」と声をかけていただいた。

「さあどうしよう？テキストは？練習用の楽器は？一体何人集まるだろうか？」等々，不安がいっぱいだった。練習には，レッスン室にある小さなパイプオルガンと電子オルガンを使うこととし，同時に10人が電子オルガンを弾くことのできる教室をレッスン室とした。交代で楽器を演奏するとして募集人員は22名(2名程度は欠席するであろうという安易な考えである。これは見通しの誤りであった。)とした。

募集を開始して2日目，SOAセンターから電話がかかり「先生，とっくに定員をオーバーして，まだどんどん電話がかかりますけどどうしましょうか？」「一応ウェイティングということで，お名前をうかがっておいてください。」そして1週間「ウェイティング・リストが60名になりましたけど……」「エーッ？わかりました。30人ずつで2クラス開講します。60人でストップしてください。」

以上が，講座の出発であった。

1.「生涯学習」に関する論文に学ぶ

今でこそ生涯学習はごく日常的なことになっているが，7年前には，教育といえば，幼児，児童，生徒，学生のためのものであった。

SOAの10周年記念誌で平岡忠先生が述べられているように，1965年にポール・ラングラン(Paul Lengrand)がユネスコの「成人教育推進国際委員会」において生涯学習の必要性を提唱し，それを受けて1971年の中央教育審議会の答申でその重要性が主張され，1981年の中央教育審議会の答申「生涯教育について」でその意義を明確に示した，とされている。

(1) 小林虎五郎「教育における成熟の概念」

最近になってたまたま手に入れた昭和27年(1952年)11月刊行の「教育学と教育史学」(乙竹岩造博士喜寿記念論文集)の中の小林虎五郎先生(聖徳大学名誉教授・前副学長)の「教育における成熟の概念——アメリカ教育についての一考察——」の論文を非常に興味深く読ませていただいた。

小林虎五郎先生の論文は，1952年という早い時期にアメリカの教育において成熟(maturity)の概念の成立が成人教育の分野において生まれたこと，合衆国の教育について，最も注目すべき動向の一つが成人教育のめざましい発達であること，従来とかく学校教育の周辺的存在として考えられがちであった成人教育が著しい躍進を示したことについてのハリー・A・オーヴァストリート(Harry A. Overstreet)の論述についての考察を行っている点が私にとっては驚きであった。

小林先生の論文のいくつかの個所を引用させていただく。

『合衆国における成人教育は，さかのぼれば，二百年あまりも前の，ニュー・イングランド地方における部落集会(Town Meeting)に，その起源を見いだすことができるであろう。植民時代の開拓者たちは部落集会において，その地域の問題を討議し，つぎつぎと新しい秩序を建設したのであって，しばしば，このような集会の経験のうちにアメリカ革命の指導者たちが養われたといわれる。しかし部落集会は直接に成人教育を目指したものではなく，それは教育活動というよりも，むしろ政治活動であって，意図的な成人教育はずっと遅れて発達したのである。

1826年マサチュセッツ州ミルバリの農民と職工たちは，自分たちの教養を高めるために，ライシャム(Lyceum)を創設した。その後この運動は急速に普及し十九世紀の中葉を飾るにいたった。』(p. 150)

『アメリカの成人教育はニュー・イングランドにおける部落集会にまでさかのぼらず，ライシャム運動から出発するとしても百年あまりの伝統をもっている。しかし，それは今世紀に入って，とくに第一次世界大戦後に飛躍的に発達したのである。婦人・労働・政治・宗教・経済・教育などに関する研究討議のための各種の市民団体が地方に発生し，その多くは，それぞれ全国的組織のもとに活動を展開した。また大学における夏季講習の発達は全米にわたって，成人教育の分野に新しい形式を開拓するにいたった。これらの運動に呼応して，地方自治体，州当局および連邦政府の成人教育に対する関心も，最近二・三十年間にいちじるしく高まったのである。この間1926年，フレデリック・P・ケッペル(Frederick P. Keppel)の指導のもとに「アメリカ成人教育協会」(The American Association for

Adult Education)が結成され，成人教育に関する諸団体と諸活動の中心機関として発展し今日におよんでいる。』(p.151)

『今後の成人教育が「成熟」に基本原理を見いだそうとするならば，一般に近代における学校教育は「成長」(growth)を基本原理として展開してきた。近代において成長の原理はルソーの自然主義にきざし，合衆国においては，デューイの「民主主義と教育」(1916)によって学校教育に確固たる地位をしめるにいたった。すでにデューイも，オーヴァストリートと同じように成長の第一の規準は未成熟であると考えた。この未成熟こそ積極的な能力であり，成長する力である。』(p.155)

『成熟の概念が学校教育の分野ではなく，まず成人教育の分野において成立したのであろうということに，われわれは何よりも大きな興味を感ずる。これを学校教育の分野で発見することは，おそらくきわめて困難であったであろう。(中略)いずれにせよ成長の概念が子どもの世界から導きだされたところに限界があり，成熟の概念が成人の世界から導きだされたとすれば，学校教育の難問を解く鍵も，あるいは成人教育の分野との接触のうちに見いだされるかもしれない。』(p.157)

『学校は，真の共感を確立し，子どもをおとなにすることを目的としなければならない。学校教育の主要任務は個人を第二次集団に共感的に参加し創造的に適応させることである。しかし，この任務にむかって学校がどのように努力しようとしても，学校外の成人社会が学校の目的を理解しないところに現在における学校の深刻な苦悶があるであろう。われわれもまた，オーヴァストリートとともに，みずからの未成熟を成熟に高めようとする成人のグループにもっとも大きな期待をかける。そして，このようなグループを育成することこそ成人教育の任務にほかならない。われわれは，学校を含めて，これらのグループが地域社会から国家さらに世界に拡大して，すべての人々を包含するようになる日を夢にえがく。それは夢といわれるかもしれないが，けっして忘れてはならない夢であろう。』(p.160, 161)

(2) 乙竹岩造「世阿彌集に漂ふ教育色彩」

(1)の小林虎五郎先生の論文を手にしたきっかけは，乙竹岩造博士喜寿記念論文集「教育学と教育史学」にこの論文が収められていたためである。実は乙竹岩造は，私の母方の祖父にあたる。乙竹岩造の主たる研究課題であった寺子屋の教育，そしてその著「庶民教育史　上・中・下巻」を，私の教育者のはしくれとしての晩年にあたり，勉強してみたいと資料を昨年夏から集めはじめたことによる。

祖父とは，第2次世界大戦中の疎開先(軽井沢)で共にすごし，終戦の天皇陛下のお言葉も祖父の部屋で一緒に聞いたのである。戦後東京に戻ってからも大塚の家が焼けてしまっていたので初台の父方の祖父の家でしばらく共に生活した。軽井沢でも初台でも，乙竹の祖父は，ひたすら研究の日々であり，厳格な学者であった。祖父は私の高校1年生のときに亡くなってしまった(昭和28年すなわちこの喜寿記念の論文集が出てわずか半年後)のであるが，後に，私がお茶の水女子大学を卒業して「教育学士」の免状を持って乙竹の祖父の家に報告に行ったところ，祖母が「孫が11人もいるけれど玲子さんがはじめて教育学を専攻しておじいさまの跡をつぐ人になった」と喜んでくれた。私は祖母の期待に反して銀行員の妻となり2児の母となって教育学とは無縁の生活を送っていたのであるが，天は聖徳

学園に私を導いてくださり，学生や生涯学習の方々を教える場を与えられ，小林虎五郎先生，松島鈞先生という，晩年の祖父に直接学んだ先生方にお目にかかる幸せを恵んでくれた。ここは一つ，祖父の研究を勉強し，未熟で拙くとも，庶民教育史についての論文を書き上げて教育の仕事を終えたいと夢見ている。

そこで，小林虎五郎先生だけでなく，乙竹岩造の成人教育の論文を探したところ，世阿彌について記した短い論文を見つけた。(「日本教育史の研究　第二輯」)

この論文「世阿彌集に漂ふ教育色彩」からも引用させていただく。

(旧かなづかいはそのまま，旧字体は一部を現字体に直した)

『美育は我が国に於ては，隨分古くから展開してゐた。ただに情操の陶冶のみならず，意念の教養がこれと断ち切り得ざる極めて緊密な関連を保って，それと共に行はれてゐたのである。いな情意とのみに限られず，総じて人間教育の深奥な原理が，これと隨伴して，相当によく現れて来てゐるのである。そして私は，かかる色彩の可なり濃厚な表現をば，かの世阿彌の十六部集の中にも見ることが出来ると思ふのである。尤も世阿彌十六部集のどこにも，教育原理が盛られてゐると言ふのではない。この集は能楽に関する眞に貴重な古典であって，その全部は芸術の香り高い記録であるが，その中の隨處に教育的色彩をも認め得るといふに外ならないのであり，その若干を茲に指摘しようとするのが，私の意図なのである。』(p.1～2)

『先づ能楽稽古の綱領を掲げたものともいふべき花傳書を取って見ると，茲に注目すべきは，芸能の修得に於ける年令段階の考，及び心身の発達に適応する芸業配当の考が，その全面に亘り，その根底に於て明かに存立してゐたこと，これである。即ち風姿花傳第一は，年来稽古條々と題せられ，最初に七才と標示し，「此芸において大方七才をもて初とす。」と示してあり，又その第三，問答條々の中にも，「先七才よりこのかた，年来稽古の條々，云々」とも言ってあって，即ち七才を以て修業の始期としてゐる。これは七才を以て就学の始とする東洋並びに西洋に於ける古来の習俗とも，合致するものである。それから後は，十二三才よりを第二期となし，「此年の比よりは，早ややうやう声も調子にかゝり，心つく比なれば，次第々々に物かずをも教ふべし。」といひ，次に十七八よりを第三期となして，「この頃は又，あまりの大事にて稽古多からず。」(略)次は二十四五を第四期とし，「この頃，一期の芸能のさだまる初なり。さる程に，稽古の堺なり。」次は三十四五と題して第五期を示し，「この比の能，さかりの極めなり。」(略)次は四十四五と題して，「この頃よりの手にたて，大方かはるべし。」(略)最後は五十有余と題して，「この頃よりは大方，せぬならでは，手だてあるまじ。麒麟も老ては土馬に劣ると申事あり。さりながら，眞に得たらん能者ならば，物数は皆々失せて，善悪見所は少しとも，花は残るべし。云々。」と述べてゐる。(略)茲に留意すべきは，年来稽古といふ言葉である。これは長年に亘る連続修業を意味するものであって，即ち教育の継続性を指示したものである。このことは，十六部集の全面に亘って諸所に謳はれてゐるのである。(略)「能は，若年より老後まで，習徹るべし。老後までの習とは，初心より盛りにいたりて，其比の時分時分を習て，又四十以来よりは，能を少な少なと，次第次第に惜む風体をなす。是四十以来の風体を習なるべし。」とも言ってゐる。かくの如く，長年に亘る連続修業である以上は，そこに年令段階の考と，心身の発達に適応する芸業

配当の考とが現れるのは，元より当然のことであって，教育上まことに意味深いものと言はねばならぬ。我が国では，年令段階を分けて教育を進める考は，貝原益軒の隨年教法に於て，初めて大いに現れたとされてゐるが，実はそれよりも遙か以前に，世阿彌によって早くも既に示されてゐるのである。世阿彌の花傳書には，應永七年庚辰卯月十三日の日附が明記されてゐるから，これは皇紀二千六十年であり，西暦では正に千四百年に当るのであって，益軒の和俗童子訓よりは三百五十七年も前に属するのである。』(p.5～6)

乙竹岩造は，およそ芸術とは縁のない人と思っていたが，このような文を発表していたのが意外であった。7才で学びはじめて，年を重ねて盛りを極め，40才より下がるのだがその時々の芸を習うべきという年来稽古すなわち長年にわたる連続修業，教育の継続性を指摘しているところがうれしい。

2.「水木ゼミ」のこと

私自身は，「水木ゼミ」(水木は電子オルガンで使っていた別姓)という，まさに生涯学習というべき個人のセミナーを長い間開いてきた。もう20年近くになる。主としてピアノや電子オルガンのレスナーが，教えるための知識・演奏力を高めるために，月1～2回のセミナーに遠路はるばる，仙台から，前橋から，浜松から，老いも(80代)若きも(10代)来てくださっていた。音楽の基礎知識(楽典・音楽史等)ピアノ・電子オルガンの最新情報，レパートリーの拡充，会員相互間の連絡などの月1回のゼミ通信や年1回の発表会(サントリー小ホールや東京芸術劇場小ホールなどを会場とした)，親睦会(軽井沢にて)など，私自身まだ大学教員になる以前であるから，まことにマメに(楽器店の後援を受けながら)資料作りやセミナーの準備にはげんでいた。

今も細々とだが続いているこの「水木ゼミ」が，SOAのパイプオルガンを使わせていただいている「オルガンへの誘(いざな)い」の土台になったと思っている。

その「水木ゼミ」で得たものは，以下のことである。

1. もう1回勉強したいという意欲に応えて決して手を抜かず，その時点で最良の，かつ最新と思われる資料を用いて，最善のレッスンや講座をすること。(いつでもやめられる，イヤなら次から参加しなくてもよい受講者は，きびしい批評家でもある。)
2. 講師，指導者が一方的に話をする・演奏をするのではなく，受講生が話をする・演奏をする機会をなるべく多く与える。
3. 受講生同士の輪・和を大切にする。大人になってからの，同じ趣味・関心を持つ方々のサークルというのは実に貴重なもので，これがうまくできたときはそのサークルが長続きし，会員同士が生涯の友達となる。

水木ゼミは，最初に参加してくださった私より年上の会員の方たちが実にすばらしく(もうすでに2人の方が故人となられたが)最盛期には90名にも達した会員を，よくまとめ，引っ張ってくださった。近頃の私自身の忙しさと怠慢のため，通信もゼミもとだえがちだが，現在も70名を超す会員のために

も私自身のためにも，決してやめることなく，何とか継続したいと頑張っている。

3. SOA「オルガンへの誘(いざな)い」について

最近発刊された(平成14年9月)SOA10周年記念誌の記録から，「オルガンへの誘い」をふり返ってみたい。

はじめてSOAの講座が開講されたのは平成4年度であるが，前にも記したように第1回の「オルガンへの誘(いざな)い」は平成8年度第Ⅰ期である。このとき前述のように，30名ずつ2クラスの講座を開講した。

松戸の近くにこのように多勢のオルガン愛好者がいたのか？と不思議な気分になる程，受講生の熱心さには驚かされた。水木ゼミと同様，この1期生の熱気とファイトが，その後の講座をささえてくれたと感じている。

私自身の工夫と努力という点では，次の事柄が挙げられると思う。

1.「オルガンへの誘(いざな)い」というネーミング。今でこそいろいろな「いざない」が見受けられるが，当時一生懸命考えてつけた講座名であった。もっとも，いくら仮名をふっても「いざない」と読んではいただけず，講座の紹介の折も「さそい」と読まれたのには困惑した。

2.「楽譜の読める人」「オルガンの経験は不要」ということで集まった，能力差がかなりある集団に対してのテキスト選びに最も頭を痛めた。音楽力も知識も意欲も十分な方から，ヘ音記号のよめない，ちょっとのぞいてみようという方までが，一応満足し，最終回には大オルガンを弾いていただくにはどうするべきか悩んだが，結局，基礎テクニックの説明には正統的なオルガン教本であるデュプレのテキストを選んだ。フランスで出版されたこの本は，音楽の基礎知識はあるがオルガンははじめての人へ，というただし書きがあり，SOAの受講生にはピッタリであるが，英・独語訳はついているものの日本語訳はない。仕方なく私が日本語訳をつけ，テクニックごとにいくつかの例題を選び出した。演奏の教材としては，手鍵盤だけのものがほとんどだが，足鍵盤も使いたいという要望にこたえて，讃美歌(「いつくしみふかき」，「きよしこのよる」など)と，J. S. バッハ作曲のやさしい曲を1曲選んだ。ごくやさしい短い曲で導入をし，音楽力の高い人の自尊心も一応満足させられる曲を加えた。

3. レッスン室の電子オルガンは，8台(後に10台)しかないので，同じことを3回くり返すことになる。学生だと2回の待ち時間を退屈して，おしゃべりしたりメールをしたりとなるところだが，そこは少ない時間をやりくりして参加している受講生たちはその間机の上で一生懸命練習する。1分たりとも無駄にしない姿勢を励ましつづけた。

4. 30人もの受講生を私一人で指導するのは無理なので，副手の清水美千代さんに常に参加してもらい，アシスタントとして協力してもらった。清水さんはレッスンの補佐のみならず，説明のための紙鍵盤(手鍵盤とペダル鍵盤の2種，裏に磁石がついていて黒板にピタッとはれる)の作製や，受講生の名簿作り(クラスの中の連絡網ができた)，美しいプログラムの原稿の作成など，まことに多彩に動いてくれた。

5. 修了演奏会では，一人ずつ写真をとり，集合写真と一緒にプレゼントした。美しい記念講堂のパイプオルガンの前で演奏する姿の写真は「一生の記念になる」と皆さん感激された。そして皆勤の方々には皆勤賞（小さな賞状と豆つぶほどの賞品！）をさしあげた。
6. あの大きなオルガンを自分の手足であやつって音を出せた喜びに涙する受講生も多かったが，ともかく音が出せ（これは鍵盤を押せば音は出るので猫が押しても出る），そして「音楽」が演奏できるように，かなり必死の指導であった。

10周年の記念誌によれば，平成9年度，10年度，11年度は，1期に5講座も開講している。これは1回終了すると当然のことのように，ぜひ継続講座を！という声がわきあがり，まず平成8年度第Ⅱ期，第Ⅲ期には「オルガンへの誘い」「オルガンへの誘い（継続）」の2本の講座が並んだ。

平成9年度には，とても私一人ではまかないきれず，片桐章子先生とご一緒に指導することとなった。片桐先生は，ていねいに，ねばり強く受講生をはげましてくださり，やや荒っぽい私と対照的なやさしさが，受講生の信頼を集めるところとなった。

継続講座は，ただ継続していろいろな曲を弾くというだけではなく「音楽と女性の歴史」（研究テーマである女性作曲家による作品――もちろんオルガンの――を中心としたもの）や「聖徳オルガン塾」（オルガンの歴史や構造をビデオなどで説明し，オルガン曲をアンサンブルで楽しむもの）なども加えた。

しかし継続の希望はどんどん雪だるま式に増え，とうとう継続講座ABCDと4本もできて，他に新規1本で合計5本となるに及んで，私のスケジュールと教室の確保がパンクしてしまい，後には継続は2回までと制限せざるを得なくなった。前述のように平成9，10，11年度の5講座開講を，平成12，13年度は，2～3講座にへらしている。しかし「継続は力なり」を信じて，現在までほとんど休むことなく続けており，来期も開講を予定している。

その間平成9年に「ミュージック・トレード」という雑誌の取材を受け，英文とも，その後4回にわたって掲載していただいたが，その記事から引用してみる。

『平成9年度のパイプオルガン講座は，5クラス93名が受講した。大正12年生まれから高校3年生まで年令は実に幅広い。その大半は一般家庭の主婦で，男性はわずか4人。SOAの全38講座の受講者総数が700人だから，パイプオルガン講座一つだけで1割以上の生徒を抱えていることになる。』

『教材は，マルセル・デュプレのオルガン教本を参考に，他は小曲，讃美歌，J. S. バッハの小プレリュード等を使用。水垣教授の手作りともいうべき教本には，電子オルガンとピアノの類似点・相違点，電子オルガンとパイプオルガンの類似点・相違点などについても簡潔に紹介されており，初心者には理解しやすいものとなっている。』

『「皆さん物すごく熱心なのです。その上達ぶりからは，日頃かなり練習を積まれていることがうかがえます。半端な練習量ではないですね。ほとんどの方が仕事をお持ちで，時間をやりくりしてレッスンに通っていらっしゃるわけですから，単なる衝動といったものではありません」と水垣教授。』

『そして修了コンサート。平成9年度Ⅲ期の継続Dクラス24名の演奏会が，去る3月31日朝9時から昼まで川並記念講堂で行われた。憧れのパイプオルガンを弾く日である。それまで練習に使っていた電

子オルガンやレッスン用の小さなパイプオルガンとは，大きさも響きもまるで比較にならない。やはり緊張してしまい，日頃の練習のようにうまくいかないのは仕方のないところである。大分違う演奏感に戸惑いつつも，全員ひたむきに演奏に取り組む。J．S．バッハやアルビノーニ，フランクなどの様々な曲目がつぎつぎと演奏された後，最後に水垣教授から修了証の授与があって解散した。なお，このクラスの生徒のほとんどが，新年度も受講したいという希望を持っているとのこと。オルガン熱はますます高まっていくのである。』

受講生によると，今でも，「前回は受付日の午後電話をかけたら，もう満員だと断られた。今回は電話機の前にすわって受付時間を待って電話をかけたので入れました。」という状態なのだそうで，ありがたいことと，パイプオルガンに感謝している。

4.「課題研究会」での発表

平成13年11月14日18時より，生涯学習研究所の「課題研究会」で「オルガンの生涯学習 ～その美しさとむつかしさ～」と題して発表させていただいた。

その折には「オルガンへの誘い」の概要や修了演奏会のビデオをお見せし，新規のレッスン風景や教材も御紹介した。

受講生はほとんどが主婦の方だが，足の不自由な方やお年を召した方，定年退職後の男性や若い東大生（男性）もいらっしゃる。スチュワーデスが1年間分の休暇を全部使って参加してくださったり，松戸消防署の職員，となりの中学校から走ってきてくださる体育の先生もいらっしゃる。

私自身，はじめてパイプオルガンにさわって勉強したのは，夫の転勤のためにロンドンに行ったときであり，3才の娘を幼稚園へ送ってその足で学校へ行ってレッスンを受け，教会のオルガンを借りて練習していたので，受講生の情熱と苦労が痛いほどわかる。

パイプオルガンは，ほんとうに美しい響きを出してくれる楽器だが，途方もなく大きく，むつかしい楽器である。よい音楽を紡ぎ出すにはテクニックはもとより，楽器・歴史の理解と音楽を愛する心が必要である。

はじめは音が出せたことに満足なさっている受講生の皆さんも「オルガンって奥が深いのですね」とすぐにおっしゃるようになる。そう，そのむつかしさを一つずつ克服して行くときの苦しみと楽しみ，これこそが生涯学習の醍醐味であり喜びである。そのお手伝いをさせていただけることが指導者の喜びであり，受講生との心の結びつき，つながりが何よりの財産である。

参考文献

1. 教育学と教育史学
乙竹岩造博士喜寿記念論文集
乙竹岩造先生喜寿祝賀会編　昭和27年11月　(株)東洋館出版社発行
2. 日本教育史の研究　第二輯　乙竹岩造著　昭和14年4月　目黒書店発行
3. 聖徳大学オープンアカデミー10周年記念誌
～SOA　これまでのあゆみ～
聖徳大学SOA(ソア)センター編　平成14年9月
4. ミュージックトレード　1998年5月号